

イロカノ語移動表現の節統合度

本研究はフィリピンのイロカノ語の移動表現を三つの補助関係（様態、原因、付随）に分けて記述し、それらを Role and Reference Grammar (RRG)の節結合 (Van Valin and LaPolla 1994) の枠組みで分析する。結論として、イロカノ語の移動表現では、補助関係の種類によっての統語的統合度の異なる構文が用いられることを報告する。またその構文バリエーションには Croft et al. (2010)が主張する「経路と様態の組み合わせの典型性」の関与は見られず、統合される二つの事象（イベント）間の因果関係が強い場合の方が、弱い場合よりも節の統合度が高い構文が用いられることを明らかにする。このことは、Talmy (2000)のイベント統合の類型論では様々な補助関係が提案されているが、この言語ではその補助関係によって、二つの事象の統語的な結びつき方は一様で無いことを意味する。

Talmy (ibid.)のイベント統合の類型論は、移動表現における経路要素の出現位置によって世界の言語を二つに分けられるとした。しかしながら、Croft et al. (ibid.)は一つの言語内においても経路の出現位置は変わり、移動表現に用いられる構文タイプにバリエーションがあることを明らかにした。そこで本研究では、イロカノ語の移動表現が補助関係ごとにどのように表されるかを検証する。ここで対象とする補助関係は様態、付随、原因の三つである (例：The bottle floated out of the cave (様態)、She danced into the room. (付随)、The table napkin blew off the table. (原因))。

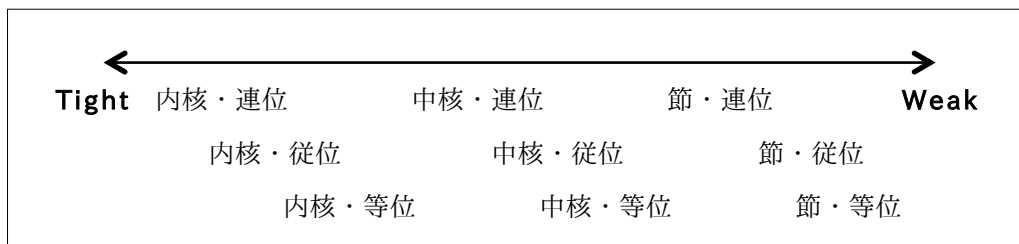
イロカノ語において移動事象の描写に使用される構文がどのように異なるのかという点を議論するために、本研究では RRG (Van Valin and LaPolla ibid.)の節結合の枠組みを用いる。RRG は節結合を「接続（結合のレベル）」と「接合（依存関係の有無）」という二つのパラメーターによって分析する。まず結合レベルに関して、RRG では文構造に階層を想定し、述語を内核、述語とその項から成るものを中核、中核と周辺の語句から成るものを節と呼ぶ。

(1) 公園でランチを食べた。

[_節[_{周辺の語句}：公園で _{中核}[_項：ランチを _{内核}[_{述語}：食べた]]]]

そして述語同士の接続を内核接続、中核同士の接続を中核接続、節同士の接続を節接続とする。次に依存関係の有無について、結合した二つの要素間に、テンスやモダリティやアスペクトといった文法範疇の依存関係がある場合を連位接合、埋め込み等の構造的な依存関係がある場合を従位接合、そのどちらの依存関係もなく自立している場合を等位接合と呼ぶ。よってこれら各三通りずつを掛け合わせて、計九通りの接続の類型が得られることになる。またそれぞれの統合度の強さには次の様な階層が想定されている。

(2) 結合の度合いの階層



この枠組みに沿ってイロカノ語の移動表現を見てみる。次の例は様態の補助関係を持つものである。

(3) a. T<imm>paw nga r<imm>uar diay botelia idiyay rukib.¹ (様態)

<AF.PFV>float LIN <AF.PFV>go.out DIS.ABS bottle DIS.OBL cave

‘The bottle floated out of the cave.’

b. 内核・連位接続：[_節[_{中核}[_{内核}[_{内核}[T<imm>paw] nga _{内核}[r<imm>uar]] diay botelia idiyay rukib]]]]

¹ 本稿で用いる省略は次の通り：ABS-絶対格、AF-行為者焦点動詞接辞、CF-移動物焦点動詞接辞、DIS-遠称、LIN-リンカー、PFV-完了、OBL-斜格、SG-単数、3-三人称、“~”-重複。また“ng”は軟口蓋鼻音[ŋ]を表す。

例 (3)では述語レベルで二つの要素が接続しており、両者はアスペクトの依存関係を有する。つまり様態の移動事象の描写には内核・連位接続の構文が用いられる。そして次に付随の補助関係の移動表現を見る。

- (4) a. S<im>rek isuna idiy kuarto nga mang~mang-an ti tinapay. (付随)
 <AF.PFV>enter 3SG.ABS DIS.OBL room LIN AF-eat OBL bread
 ‘He/ she entered the room eating a bread.’

b. 中核・連位接続：[節[中核[中核[内核[Simrek] isuna idiy kuarto] nga 中核[内核[mangmangan] ti tinapay]]]].

上の例では二つの中核が接続しており、またこの接続レベルで問題となるモダリティの依存関係を有する。よって付随の移動事象の描写には中核・連位接続の構文が用いられる。

最後は原因の補助関係の移動表現である。この種の事象の描写に用いられる構文は単純な階層構造から構成され、いかなる接続も持たない。

- (5) a. Na-i-tayab diay table napkin idiy lamisaan.
 PFV-CF-fly DIS.ABS table napkin DIS.OBL desk
 ‘The table napkin blew off the table.’

b. [節[中核[内核[Naitayab] diay table napkin] idiy lamisaan]].

ここまでをまとめると、付随関係は中核・連位接続の構文で表され、様態関係は内核・連位接続の構文で表される。そして原因関係は複雑構造を持たない構文によって表される。そしてそれぞれの構文を(2)の階層に当てはめて分析すると、次の様な統合度の階層が得られる。

- (6) 原因関係 > 様態関係 > 付随関係
 (単純構造) (内核・連位接続) (中核・連位接続)

最後に、この統語的な階層を動機付ける意味的要素について考察する。三つの補助関係において、移動事象に対してより強い因果関係を持つ共イベントは、因果関係が弱いものよりも強く統合されている。原因関係によって結びついた二つの事象が最も強い因果関係を持ち、そして最も強い統語的統合度の構文で表されている。残りの二つの補助関係を比べると、様態関係によって結びついた二事象は互いに切り離せず、例えば (3)の例では瓶は浮かんでいるからこそ洞窟の外に移動できたと言える。一方、付随関係によって結びついた二つの事象は互いの因果関係が最も弱く、例 (4)では食べるのを止めても、それに関係なく移動は続くものと考えられる。この二つの補助関係においても、因果関係の強弱と統合度の強弱は対応しており、様態関係の方がより強い統合度の構文で表される。つまり、統合される二つの事象は、その関係性によって統語的により強い結びつきで表される場合とそうで無い場合があるということになる。そしてイロカノ語には、Croft et al (ibid.)が主張する「経路と様態の組み合わせの典型性」によって構文のバリエーションが動機付けされているという説明よりも、上述した因果関係の強弱による説明の方がより妥当性があると言える。

参考文献

- Croft, W. et al. (2010). Revisiting Talmy’s typological classification of complex events. In H. Boas (Ed.), *Contrastive construction grammar* (201–235). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins. / Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics, Vol. II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press. / Van Valin, R. D., Jr., & LaPolla, R. J. (1997). *Syntax: Structure, meaning and function*. Cambridge: Cambridge University Press.